



野生植物研究所だより



● カンワラビ 昔は食用、今は観賞用 ●

秋になると、各地の道の駅や土産センターなど、地場産の野菜や果物等が売られる店の一角の草花を売るコーナーにも、「カンワラビ」と書かれた鉢物が並ぶようになります。カンワラビは、昔は冬場の貴重な食料の一つだったようです。ところが、近年、このカンワラビは野草ブーム等で、各地で開催される野草展などの展示会でも、必ずと言って良いほど見られるようになりました。カンワラビが道の駅や土産センターでけっこう良い値で売り出されるのも頷ける所です。

● カンワラビは、フユノハナワラビなどの方言 ●

カンワラビは、秋に栄養葉と孢子葉が出る冬緑性の多年生シダです。カンワラビと名が付けられ、売られているものを見ますと、フユノハナワラビ、エゾフユノハナワラビ、アカハナワラビがあります。これらのフユノハナワラビの仲間、ハナヤスリ科、ハナワラビ属のもので、宮城県内では他にオオハナワラビやヤマハナワラビが生育しています。中池敏之著「シダ植物の方言小事典」（羊子社出版部，平成15年4月）によると、フユノハナワラビをカンワラビと言っている所は、山形、長野、静岡、三重、和歌山、広島、山口があるようです。その他、シモワラビ、フユワラビなど、16の方言が記載されていました。



みなさんが見ているカンワラビ、どんな種類なのでしょうね。
気を付けてみるとおもしろいですね。